

第 5 回泉佐野市教育問題審議会 会議録要旨

開催日時	平成 23 年 2 月 28 日（月）午前 9 時 30 分～11 時 30 分					
開催場所	泉佐野市役所 3 階 大会議室					
案件	・ 第 3 回審議会の議事録の確認 ・ 学校訪問を受けての感想、意見等について ・ 案件 (1) 小学校の適正規模について (2) 基本的方向・方策について (3) その他					
委員出席者	菅 会長	佃 副会長	馬野 委員			
		谷口 委員	杉浦 委員			
	尾上 委員	西阪 委員	高橋 委員			
	角倉 委員	菅原 委員	西野 委員			
	大南 委員	重信 委員				
事務局出席者	根来学校教育部長 古木教育総務課長 神於教育総務課教職員担当参事 坂口教育総務課施設担当参事 林人権教育室長 中上学校教育課長					

1. 開会

【会 長】 定刻の 9 時 30 分となりましたので、只今から第 5 回泉佐野市教育問題審議会を開会いたします。本日の出席者は 13 名で、会議が成立しております。

〔会長挨拶〕

それでは、本日の審議に入ります前に、前回の審議会の議事録についてご確認をお願いします。事務局から事前に送付しておりますので、ご覧いただいたと思いますが、委員の皆様で修正等がございましたらお願いいたします。

（質疑等）

無いようですので、議事録についてはご承認をいただいたこととします。

次に、前回、2 月 18 日に第三小学校及び第二小学校を訪問させていただきました。学校訪問を受けて、この委員の中で話し合いをする機会がありませんでしたので、若干時間をいただいて感想あるいはご意見、特に小規模校、大規模校に関して率直なご意見等いただけたらいいかなと思います。前回は第二小学校、第三小学校で授業風景とともに校長先生から学校の概要、そして大規模校、小規模校の良い点あるいは課題点等の話をいただいて、意見交換を若干でしたがさせていただきました。そこで委員の方々が感じたご意見等、ご感想等いただけたらと思います。都合によって当日出席されなかった委員の方もおられましたが、そういう話をお聞きいただいてイメージを持っていただけたらと思います。

【委員】 前回の会議でも出されていたように、中学校における少人数指導の徹底というのが非常に大事なかなと思います。基本学力を定着させるためには、少人数で、できたら複数の先生が関わって指導していくのがより効果的かなと思います。

これは小学校でもいえるものではなかろうかと思います。特に感じるのは、生徒指導上の問題です。それにつきましては、大規模校では私も以前、別の学校で全校 1700 名、一学年 13 クラス 39 学級の学校に勤めたことがあるのですが、そうなってくると見える範囲が限られてくる。適正規模がどの程度になるのかは分かりませんが、今勤めている学校が全校で 14 学級ですので、その時と比べると全く見える範囲が変わってきますし、迅速に対応ができるし、教師のチームワークもできますし、保護者との連携もスムーズにいくという、そういう利点があるかなと思います。そんなふうに感じました。

【委員】 第三小学校と第二小学校の校長先生のアピール点の違いを感じたのですが、第三小学校の方がアットホームな感じで、きめ細やかなサービスがされているなと感じたのと、逆に第二小学校では人数は多いけれども、学力は落ちていないという、少し消極的なアピールだったと思います。

数の上ではこの中でもお聞きしていたのでイメージはあったのですが、現場を見て、これは明らかに一人の先生が子どもにかける時間と質の違いがすごくあるだろうなと感じました。決して第三小学校が陸の孤島でも、山の中のへき地でもないのに、近い距離の学校同士で大と小があんなに沢山広がっていくのを、これまで市の行政としてどのように見ておられたのだろうかと感じました。泉佐野市では、問題は小規模ではなく、大規模の方に問題があるのではないかとすごく感じました。市や教育委員会は、そういう状況を見てきたのですよね。平成 15 年に審議会が立ち上がって、それがうまくいかなかったという事ですが、今のこの時点でも良いので、市としては審議会の統廃合のどうこうという結果は別として、泉佐野市の教育を本当にどういうふうに変えていきたいのかという思いというか、ビジョンがあるのかを聞かせていきたいと思います。

【委員】 学校訪問を興味深く見学させていただきました。どちらの学校も先生方が非常にお若いという印象です。私はテーマを持って見に行きました。一つは、社会性、皆の中で競い合うというか、生き抜くというものを、どんな教育の中でやっているのかという点。児童の持っている能力をどんな形で引き出すのかなと、学力や体力は数値で別途出てくると思うのですが、見えないところで、そういうテーマで、ただただ分かるのかなと思いました。第三小学校に行ったとき、教室によっては 20 名を割っている教室を見ましたら、非常に静かで落ち着いているのですが、ここで切磋琢磨する機会は少ないかなという感じはしました。反面、生徒数の多かった方を見て、30 名はいるなと、第二小学校へ行って何となく問題も起きそうだけど、活発というか、我々が通ったら、こちらに手を上げてみたりで、ああいう中で育つということは、非常に社会性というか、そういうものが育つチャンスが多いのかなという感覚。もう一点、第三小学校は後ろの貼り物の中に、先生の個性というか、色々教室ごとに違っているし非常に努力をされているなという印象を受けました。授業内容は、第三小学校の高学年の先

生、ベテランの先生で、あのような授業が良いのかなという感覚。第二小学校は授業時間を見学する時間が短かったので、問題点を聞きたかったのですが、報告・連絡・相談(ほうれんそう)でチームプレイというか、組織で問題を防いでいるという話がありましたが、本当に問題がないのかなと内心は感じました。

【委員】 第二小学校の校長先生から、学力は優秀との説明がありましたが、特に大規模校、小規模校で点数の差があるようには、私は見えていないです。泉佐野市の子どもは、皆少し頭良いのかなと、そういうふうな感覚で捉えていました。もう一つは、審議会の進め方ですが、財政を含めた、本当に泉佐野市が小学校の問題をどうやっていきたいのか、取り組んでいきたいのか、教育委員会もどうしていきたいのか、そのビジョンが私たちに見えない中で、色々と言うことが大変むなしい感じもします。また近所の人から、質問されても答えようがありません。どうしていくのかという大きなビジョンが見えない中で、質問されても私たちは答える知識も何も持っていないから、このいただいた資料の中でわかる範囲で答えるだけで、もう一步進めないから本当に地域の人がどう思っているのかを、私が代弁してここで発言することもできません。そういうジレンマにあるということを、わかっていただきたいと思います。

【委員】 第三小学校と第二小学校へ行かせていただいて、第三小学校は人数が少ない分、先生方が一人ひとり丁寧に関わることができるという利点は非常に感じました。それは子どもたちにとって、丁寧に行き届いた、温かい環境の中で学ぶことができるというのは、ある面大変うらやましいなと思いました。地域との関わりも、第三小学校では大変強調されていて、それも今欠けているところでもあるから、大変良い取り組みを続けていると感じました。第二小学校に行くと、同じ泉佐野市の子どもたちの学ぶ環境がこんなに違うことに大変驚きました。歴史のある学校と新築した学校と、たまたま場所の関係で見学したと思うのですが、ガスファンヒーターの温かい教室で活気あふれて授業を受けている人数の多い中で学びあっているというのは、同じ泉佐野市の小学生として随分違うなと感じました。小規模校が大変素晴らしくて、あの小規模の小クラスの人数が複数あれば、入れ替わりもあって大変良いのと思うのですが、1クラスしかないというところに、とても残念だなと感じました。2校とも佐野中学校へ行くのですが、第三小学校の子どもが一人、二人にならないように配慮しているという事でしたが、それでも第三小学校の環境で育った子どもたちが、大きな学校へ行って大変しんどいものがあるのではないかなと感じました。

【委員】 第二小学校と第三小学校を見たときに、佐野台小学校も第三小学校と同じような規模です。取り組みも余り変わらないことをしています。親としては先生の方が行き届く小規模校の方が良いなと思いました。親としては、大規模校も小規模校も大して変わらないと思います。先生方は日夜一生懸命教育に対しては頑張っているし、ありがたいなと思うし、親御さんも多いからとか少ないからというのではなくて、総体的には変わらないなと思いました。大規模校が持つ問題点と小規模校が持つ問題点は、見ればそのまま浮き彫りになるというのは感じました。

市の財政としては、施設に関して大きくて古くなったからあれだけ立派な物が建つということで、人数の少ない第三小学校や佐野台みたいなところがあらわれるというわけではないのですが、もう少しあれだけの物を建てる前に考えて建てていただければ良かったのかなと私は思わずにはいられません。古いから綺麗に建替えないといけないのは分かるのですが、もう少しお金の使い道を分散して欲しいです。新しいものを建てるとか、新しい対処をするときに考えていただければと思います。今回つくづく思うのは、少ないから多いところに合併させるというのは、どうなんだろうと思います。今から始めることに関しては、どこにお金をもっていくかというのはすごく考えていただきたいと思います。子どもたちが教育を受けるなら皆さん綺麗な施設で受けたらいいし、今からもし第二小学校と第三小学校の校区割りをした場合、第二小学校に行っている子が第三小学校に行きましょくなったときに、子どもは純粋なので綺麗なところで勉強したいと思う子どもは多いと思います。お金の使い道をもう少し考えて、大切な税金なので考えていただきたいと思います。第三小学校にしても佐野台小学校にしても、災害避難場所に指定しているので、どこかに吸収されるとして、その建物を維持するためにお金がかかるのなら、そのまま校区割りをしながら残していった方が、大切な財政をまわすのは良いかなと思います。親としては子どもたちが似たような環境で、先生たちの指導は公立なので全部同じだと思うのですが、環境はどうかなるものだったら考えていってほしい。私は多分お金だけなのかなと思うのです。耐震化で新しく建てないといけないというのは、大規模校、小規模校は関係ないのかなと思ったのですが、市の財政のとり方というのはもう少し明確にしていればありがたいなと思います。校区割りが非常に大事だなと思ったのは、新池中学校に一部の第二小学校の児童が来るのです。あれだけのなかで生活していた第二小学校の子どもたちの一部が新池中学校に行くというのは、子どもたちはかわいそうだなと今回つくづく思いました。小学校と中学校の区割りというのは見直していただきたいなと思いました。

【委員】 大きく3点、一つは子どもの側から、教師の側から、地域の側から、こういうくくりで今回の第三小学校と第二小学校を見させてもらって見える部分と、今回で見えなかった部分は私の経験上からの話になるかと思います。先ず子どもの部分について、学習面で大規模校が良いか、小規模校が良いかというのは、1学級が何人かということに関わってくると思います。従って、大規模校だから学習面でどうだという、この部分は少し論じにくいかなと思っています。ただ、生徒指導上学校が抱える、あえてリスクという言い方をしますと、発生する事故等の率は子どもの数が多ければ多い程、当然生徒指導上の問題も発生しますし、率も高いということがあります。

小学校ということだけを考えれば、できれば小中一貫という観点で考えたときに、せっかく子どもたちを仲間づくりとして6年間育った子どもが中学校で分かれてしまう。こういう現実、しかも平等に分かれるというよりは10人卒業すれば7人が3人がこういう分かれ方になっているというのも現実だと思いますので、できれば出口ということを考えれば、同じ中学校区に進めるような状態にある方が良いかなと思っています。

教師の側からすれば、当然30人40人、1クラスの子どもの人数はその時その時に

よって変わってきますので、大勢の人数があるということは隣のクラスの子ども、あるいは6年の担任が1年の子どもを知っているかとなると、少人数の場合小規模校はそこまでいくと思います。ところが、大規模校になるとそこまでいかないという現実にあります。これは生徒指導上の問題やいろいろな子どもの社会性とか、いろんなところを学校全体でみていくというところについては、どうしても薄くなるというふうに思います。しかし、手をかけない分だけ子どもはたくましく生きるという部分もあります。従って、この部分については、大規模・小規模というところで、天秤にかけにくいなというふうに正直思っています。

地域については、色々な学校との関わりという思いというところも含めてどちらがどうかというのは、歴史に関わってくると思います。従って、学校の存続に関われば、やはりそこに熱い思いを持った地域の方がいるわけですから、このことについてどの論点で校区割りを考えるかということはあるかと思うんですけど、何らかの思いをどういうふうに整理するかという部分と、それから機械的に財政的な観点からの部分の問題を天秤にかけようという話になっているのかなと思います。結局は教育という部分だけに限っていえば、その効果が出るか出ないかということは、むしろ先生方の指導の内容や力量によるところが多くて、もし小規模校の良くない部分が今回見えたとすれば、それは教育内容のあり方だと思うし、大規模校のまた良くない部分が見えたとすれば、大規模校の中での指導のあり方というものも当然問われるべきだと思う。わが身に振り返って少し厳し目に言うと、ただ物理的に抱える問題というものは、今まで論議されてきたように子どもとのコミュニケーションの数がどうしても少なくなるというのは、あると思います。しかし、それを強みに変えるか、弱みに変えるかというのは、私たちの教育に身をおいている側によって子どもたちの状況も変わってきますし、だからこそ私たちがいろんな面で研鑽を積み重ねなければならないという部分があります。ただ最近、学校へのボランティアとかPTA活動とかいうところで、旧の役員から新の役員へバトンタッチをするときに、なり手を探すというか、どこも困っているのではないかなというふうに思います。そういうところで、大規模校、小規模校とこの部分でも課題は共通していると思います。結論からいうと、教育内容の観点から見ると、なかなか天秤にかけにくいなと正直に思っています。

【委員】 第三小学校の印象は、地方の昭和30年代くらいにできた学校のような印象を受けました。ある意味で懐かしさを感じるのですが、まだこういう学校が残っているんだという印象があります。耐震工事とか子どもの安全性という意味では心配かなという感じがします。第二小学校は新しいだけに非常に明るいいし、機能的な構造になっているのかなというふうに感じました。

適正規模ということで考えているわけですが、どの都道府県でもどの地域でもそういう問題を抱えているんだろうと思います。例えば第二小学校の874名のうちの350名ほどが第三小学校の方の校区へ移れば、ほぼ均等な小学校ができるかなと、そうしたらこれが一番良いんじゃないかなというふうな感じがするんです。ところが、第二小学校の350名の子どもが第三小学校へ移ると机上で考えた場合、そこに住んでいる子どもたちの思いとか、あるいは保護者の思いとか、地域の方の思いとかをどう

保障するのかなという大きな問題も出てくる。逆に、第三小学校の 114 名を第二小学校へ移して 1000 人規模になりますけども、そういうことにしましょうということであれば、それはそれである意味で機能的というか予算的には良いのかもしれないけども、114 名の子どもたちや保護者や地域の人たちの思いはどうなるのか。これはどこでも必ずついてくる問題ですね。何らかの形でどこの都道府県も市町村もそういう工夫をしているが、一方がリスクを受け入れるわけですが。受け入れる方の一方の人にとってもメリットがあるということをどれだけ保障できるかというのが、やはり大きな問題かなと思っています。限られた予算の中で、予算があれば第三小学校を増改築してということでも良いんだらうけども、限られた予算の中でどこをどう変えていくことが一番ベストじゃないけどもベターなのかなと、そういうあたりだろうと思います。

最近、品川区立の新設校の小中学校へ行ってきた報告を聞いたのですが、区立ですから公立学校です。公立学校でもここまでするかという、本当に素晴らしい第二小学校の比ではないです。温水プール付きです。それが公立学校でできてくるんです。それは何かというと、そこに集まるための子どもたちにメリットがあるよ、ちょっとくらい遠くてもここへ来てもらったらメリットがあるよ、そういう非常に魅力のある学校のハード面をつくっています。同じようなことで京都の御所南小学校というところがあるんですが、地域の小さい古い学校が集まって新しく作られた学校ですが、当然その当時の魅力的な学校ということで、全館冷暖房で非常に魅力的な学校です。ただハード面だけではなくて、御所南は毎年研究発表会をしています。ハード面も充実すると同時にソフト面も充実して、京都市の中でもトップクラスのパイロット校になるような、そういう魅力をいれて御所南小学校あるいは高倉小学校というような形にしていっているわけです。適正規模ということでいくと必ず誰かがリスクを背負わざるを得なくなるので、その子どもたちやあるいはその保護者やその地域がそのことを受け入れる代わりに、それなりの大きな魅力というかメリットが見える形で提案していただかないと、なかなかこれは動けないのではないかなというような感じを改めて感じました。

【委員】 皆さんの話では大きく二つの方向性の話が出ていたと思います。一つはこの市の教育の方向性を明らかにしてこの問題は考えるべきではないかと、私もそう思います。そうでないと、犠牲になった人たちは立つ瀬がない。もし、廃校等がありましたら、廃校になったときには何か良いことがその分あるとか、未来のこの市のためにここは私たちが我慢することで市全体の未来の利益が増えるというような話になることがきっと望ましいと私は思います。この委員会はそのための一つの足がかりになるべきだと考えて、今日までのいろんな論議を聞かせていただきました。前回参加させていただいて非常に良かったです。一つは少人数の小学校というのを改めて確認させていただきました。私が別の市で関わっているところですが、第三小学校と同レベルの同人数くらいの学校と、もう一つは中規模校でどちらも学力的には高いです。廃校が決まっている少人数の学校の先生方とも話をしながらの意見をここで今までに何回か述べてまいりました。

それと、もう一つはある学生ですが、広島県の内陸部の奥地の僻地校から中学、高校、大学ときて大学で精神的に不安定になりました。その学生がなぜ大阪に来て

そうなったかという、ずっとつきあいながら分かってきたことが僻地出身ということが大きく関係しているんです。少人数で育ってきたことのデメリットを本人が一番強く訴えています。中学までよりも高校になってからが本当にきつかったと、大人に近づいていけばいくほど人間関係で割り切る部分とか割り切られている部分とか調整していく能力は必要になっていくと思います。それが大人になっていくという部分だと思います。私はそれを小中学校でうまく身に付けていないとはっきり言います。それは今回のこの委員をしながらすごく自分の問題意識にあります。

前回の二つの小学校を見させていただいたとき、よくハイテクの学校を造られたなと、私は泉佐野市のある意味での勇気を感じます。絶対に他の小学校からずるいと言われても仕方のないレベルの素晴らしい学校が出来上がっています。いずれこれからここがどのような建物もいずれは建替えていかないとちませんから、その時のモデルを造られたんだと私は受け取りました。

京都市は伝統のある、明治の学制発布で小学校ができて以来の学校をつぶさないやっていたいけなかった。京都の人たちはほとんど地元の人たちが残っていますから、自分たちの小学校が無くなるというのはものすごいことなんです。それを乗り越えるための一つの施策が素晴らしいハード面の学校を造ることだったのです。だから、地域の人たちが必ず入れるように係わってもらえる施策も打っています。この素晴らしい小学校であれば、自分たちが育った小学校が無くなっても仕方がない、その代わりここでおもいっすり良い教育をしてもらおうんだという意気込みを感じます。

品川区の施策は、学校が多すぎて統廃合が目の前にやってくる時に、どういう基準で学校を残していくかというときに教育内容で勝負してもらおうということになったんです。どこでもいいから学校を選んでください、その代わり教育内容で勝負しますからその教育内容を明らかにするので、という形である程度の競争を取り入れて、保護者に選択させながら学校のハード面にも、お金には限界がありますから軽重をつけていったと思います。そんなにはっきりと言っていないですが、それに近い話はあちらこちらから聞きました。

泉佐野市はこれからだと思いますが、校長先生がおっしゃられているように、子どものキャリア教育という観点からいうと絶対に小学校の集団はできるだけ同じ中学校に上がっていくように校区を整えていかれることは重要だと思います。中学校の教員はもっと良く分かると思います。ある程度の人間関係が確保された上でより大きい集団の中での切磋琢磨の基礎部分は保障してやりたい。第三小学校の校長先生が、あがる中学校のクラス分けについてはできるだけ配慮をお願いしていますと、みんな均等にばらばらに1人とか2人になるようなふうにはお願いしていませんとおっしゃっていました。でも40人の中学校1年の見ず知らずの中に、多い中に入っていくというのは実は大変なことなんです。単に知らない人が増えるということだけではなくて、小学校と中学校の根本的な違いがあるんです。一人の先生が見るわけではないのです。担任の先生は、朝来て10分くらいその子の顔を見たら、あとは昼ご飯の時から最後の終礼の時まで自分のクラスのところに行かないんです。一人の先生がずっと自分のことを見てくれているという状況は小6から中1になる段階で無くなるのです。ここはものすごく大きいです。40人の知らない集団の中に一人の子どもが放されるんで

す。毎回先生は違う人がやって来て、その都度その先生の目で自分は見られるわけです。その子がどういう集団の中で、今日朝掃除のときにこんな事があったけれどもとかいう話がどれくらい伝わるかというのは、その学校の指導体制に関わってくるんですが、それはサービス面で大小が出ざるを得ないです。小学校のようなサービスが中学校ではなくなると思われて、保護者の方は中学校へ送り出す方がいいんです。でも、そこは意味があるんです。大人になるというのは、そういう事なんです。段々手が離れていくようにしていかなないと、最後社会人になれないんです。大学ではもっと手を離します。だから、大学は中退する子がかかり出やすくなります。過渡期の部分を中学校は役割を背負っているの、そういう意味では人間関係の調整をする能力とか自分のしんどい部分も抱えながら知らない人とうまくやっていくとかということを、経験する場としては必要なんだと思います。

もう一つはモデルがある。それは1年から6年までの先輩後輩のモデルが多様にある。学年を越えて一杯モデルがあるというのは、小学校で重要だと思います。それと多様な大人と出会うことができる。子どもが出会う大人は、家族以外だと学校の先生なんです。地域の人とも最近ほとんど出会いませんので、学校の先生が一番の出会う大人なんです。嫌な先生から好きな先生までいろんな大人と出会うという経験も私は必要だと思います。学校経営の観点からいうと、教員の人数が少ないということはやれることも少ないです。生徒の人数が多いといろんなトラブルも多いですが、やれることも多いです。この違いはあるかなと思います。学校がやれることが多いのは子どもが経験することの多様性もあるということだと私は考えます。

【会長】品川区と京都市の話が出てきましたが、文化歴史が違うというところで一概に泉佐野市あるいは大阪府と同じように見ることはできないだろうし、かといって品川区、京都市はプロパガンダつまりPRがうまく、かなり世の中ではうまくみえるんですが、なかなか課題が多くて先生方もブーブー言ってる、保護者はもっともっとやってくれと言っている、そう簡単にはいかないだろうと。

しかし、そういうふうに見ると、泉佐野市は大都会でもない、かといって地方の小さな都市でもない。中途半端な大きさなんだろうと思います。泉佐野市はリソースはかなりあるというふうに思います。いろんな資源、人材があって、閑空もありますし、またまあうまくいかなかったかもしれませんが、今そういう状況にあるということだろうと思います。やはり一番考えるのは、第三小学校の子どもたちに本当に良い教育というのは何かと考えた場合に、私自身がクエスチョンマークを持ってしまう。確かに少人数であればいいというふうに世間ではいいですが、では学力は少人数にしたら必ず伸びるのかという、これも定説もないしデータの的にもなかなか弱いというところがあります。今回訪問して気付いたのは、6年生が28人卒業して入ってくるのが16人で、また減ってくるということです。予算がまだはっきりしませんが、例えばその学年に72人の子どもがいたと仮定すると、今が40人学級であると36人のクラスが2つできると、しかし35人という線が引かれると24人のクラスが3つできるという。24という数が出てくるんです。そうすると、6年生の28人というのはそれよりちょっと多い。でも16人になってしまうと、ほんとうに子どもたちにとって少ない人数が良いのかどうなのかというこ

とだろうと思います。教育関係をやっていると、児童は先生の影響を受けるというふうに我々は思うのですが、やはりそれ以上に子ども同士でメンタルなところとか子どもの社会の中で子どもたちが大きくなっていく。やはりそういうところにいろんな子どもたちとの触れ合い、或いは考え方に触れていく、子ども社会の中で育てられるとすれば、やはりいろんな子どもたちに触れることが大切なんだろうというふうに思ったりもします。

もう一つ、間違っているのかもしれませんが、配慮という言葉は言葉としては非常に綺麗だし、教育者は配慮という言葉を使って色々手厚いこと、アフターケアも一杯するんですが、本当に配慮というのが子どもたちにとって良いのか悪いのかということがあります。逆に、一般の方々からすると、それは甘やかしに過ぎないんじゃないかという考え方もあるかと思いますが。中学校で配慮していただいている、当然教育者として当たり前だけでも、そういう配慮しなければいけない状況を作っているのは、泉佐野市ではないのかと、逆の見方なんですけども。ですから、もうちょっと子どもたちが小学校のときに色々な子どもたちと交流していれば、その配慮というのは要らなくなるわけです。ですから、配慮イコール一番良い言葉に聞こえますけども、本当にそれで子どもたちを育てあげられるのかという、今回のことに限らずに私がいつも考えていることです。ですから、子どもたちにとってどれが一番良いのか、このままで小人数 10 数人でいって社会性や色んなものもあるかと思いますが、育てられるのか或いは仮に統合して他の小学校と残りの人と交流した場合どちらが子どもたちにとって良いかという話なんだろうと思います。そこを今委員の方から色々いただきましたので、また考えていただかなければいけないところかなと思います。前回出席できなかった委員の方で、今の話或いはご自身のお考え等がもしありましたら、ご質問でも結構です。先ほど委員の方々からいただいたご質問については、至急教育委員会の方へ投げたいと思いますが、いかがでしょうか。

【委員】 子ども同士の影響は、非常に大きいです。学校から帰ってくるのも、基本的に子ども同士集団で帰ってきますし、学校の中での活動等で子ども同士の影響は非常に大きいです。訪問された方の話で共通していたのは、第三小学校の子どもは人数が少ない、どちらかというとおとなしい子どもが多いというような印象です。第二小学校の方は沢山いるということで、皆さん活発だというような意見もあったと思います。子どもを育てていく上では、ある程度の規模が必要なんじゃないのかなと感じました。新しい校舎を建てたかと思うと一方で統廃合をする、結果的にそうなったのかどうかわかりませんが、見方によってはばらつきがあります。それを今後どうしていくのかというのを、これから示していかないといけないのではないのかなと思います。1 学級の中での人数がある程度の規模がないと中々うまくいかない。理想的にいうと 25 人から 30 人くらいの間の学級がいくつかあるというのがたぶん理想なんだろうけども、国の法律の問題もありますので、なかなかぴったりと綺麗にいかないと思うのですが、理想的なかたちを目指していく。そうでないとリスクを負う方が必ずいます。小さい方を無くすにしても大きい方が半分に分かれるにしても、いろんなリスクを負いますので、ある程度こうすることによって皆さんにとってプラスになるよというメリットも出しながら

進めていかないと、どんどん縮小傾向になっていく。非常に未来が見えないし、皆さんの合意を得られない。必ずリスクを負う方もいるのだけれども、最終的には全員がある程度一定の満足のいける利益を与えられるようなかたちにもっていかないと、なかなか話は進まないと感じました。

【委員】 中学校の校区の中に小学校が2校なり3校なりが1中学校へ行くという形にしないと、今のような新池中学校に5つの小学校から来るような、しかも全部ではなくて一部分が来るような中学校があるわけで、基本をきっちりしていただきたいなと一番思います。

京都市の場合は泉佐野市とちょっと事情が違うんですね。京都の場合は、住民が統合していく意識をもって、統合であって廃校でなかった。敷地が狭いので、3階にし、温水プールをつくる。そのような住民にメリットを与えながら歴史も残すため、資料館も建てた。京都の場合は、理想的なものであったと思う。

泉佐野市の場合は、財政上の問題から佐野台小学校と第三小学校の統廃合で廃校を考えたかどうかという諮問内容からこの審議会はなっていると思うんですけども、問題があがっているのは逆に1学年4クラス以上生徒数でも800人のような、大規模校の方をなんとかしないといけないという印象の方が非常に強いです。佐野台小学校も第三小学校も全校生徒が120名くらいの学校で、このままでいいという感じも私は教育面から見ても疑問を感じる部分ではありますが、大木小学校はどうするのか。ここはもっと少ないのでそこらも含めて、一つの学校が同じように2、3クラスで、学年が100人くらいで5～600人の学校が一番良いんだったら、800人近い学校をどうするのかという部分と、極端に少ない150人以下の学校をどうするのかという分では、将来的にみて、非常に見にくいこともあるんですが、そこらを市が基本をどうするかというのをを出していただいた上でないと、なかなか結論は出にくいんじゃないかと思います。特に大木小学校の場合、特認校だから良いという問題ではないと思います。そこだけの児童だけなら2、30名、よそから行ってるから5、60名になっているのであってそこらは本当にどうするのか。問題が一番大きいのではないかと感じます。本当に小規模校の問題をやるのであれば、一番問題なのは大木小学校だと思います。1中学校で2、3校の小学校の子どもが同じ中学校に行くというなかで、学校選択できるように自由選択性を入れた中で、1中学校で2、3小学校の制度にすれば、親もそれぞれの中で選択もできると思います。教育は確かに先生の力量等もあります。方向性、基本方針を明確にしてもらった方が、その上で通学距離が長い場合は通学バスなり方法は後で考えたら良いので、方向性を出していただきたいです。

【委員】 大規模校、小規模校ができたのは、いびつな校区でずっときた現状が1番大きいと思います。10年先、20年先を見据えた先のことを言えば、やはり今の機会にしっかりとビジョンをもって通学区の変更を行うのが一番色々話を聞いているなかで感じたところです。一つ、二つの学校を捉えてのデメリット、メリットはあるのですが、それは目先のことでしかなくて、今これをやるというメリットがあるんですよという理由付けをつけていくには、やはりある一定の方向性と、そして今ある課題を

解決できるのであればそれをしっかりと方向に向かったの解決をとるのが 1 番なのかなと感じました。子どもたちにとっての適正というのは、おとなが判断するのと子どもたちが判断するのと違う部分もあるかもわからないのですが、大人たちが与えてあげるというのは語弊はありますが、整えてあげられる環境はありますので、それについてはやはり十分議論してやっていけば良いのかなと感じました。

【会 長】 今回の我々に課せられた課題といいますか諮問というのは、市内の小学校の適正規模と統廃合ということを諮問されて、それについて答申を出していくということで、勿論その中にはいろんな要素、先ほどから出ています財政的なものとか校区という、勿論そういうところにも切り込んでいかないと綺麗に解決しないというところがあるんだろうと思います。平成 15 年 9 月に泉佐野市立学校通学区審議会がありまして、見直しは困難という答申。7 年経ってそれが困難なのかどうなのか、再度それを課題としてもう一度チャレンジしてもらおうかというようなことは、答申には考えられるんですけど、ここでどうしようという話はちょっと難しい話で、我々に課せられたのは、適正規模と統廃合についてで、勿論要素としてはこういうのがあって市に投げていくということも十分に考えられるかと思っています。委員の方々からのご質問の中で、そういうことを入れますとどうしても泉佐野市の教育のビジョンというものを伺いたいというご質問が 2、3 の委員の方々から出ましたので、泉佐野市の教育をどうしていきたいのかというビジョンを伺えればと思いますが、いかがでしょうか。

【事務局】 平成 15、6 年当時にこういったことが問題にならなかったのかということがご質問としてあったと思います。空港がきまして、関連地域整備事業を行い、りんくうタウンを造成して空港連絡道路ができるということになりました。空港連絡道路の幅員が 100 メートルを超えるような部分もありまして、地域を分断するのではないかとという事で、きちっとした位置付けではなかったのですが、りんくうタウンの中に建設用地的なものを確保していただきました。平成 15 年当時にそこに小学校を建てて、第一小学校の校区が横長に広く電車通学をしている子どももおられますので、空港連絡道路を挟んで、今小学校のないところに一つ造って、第一小学校と第三小学校があるのですが、そこをできたら統廃合をしたいというふうな構想がありました。ただ基になる第 14 小学校の建設が財政的な問題もあってできないということで、なかなかそのあたりが前に進まなかったというような状況です。その当時の人数でいきますと第一小学校が 500 人くらい、これはほとんど今と変わっていません。第二小学校は 670 人で今 870 人ですから、200 人増えています。第三小学校はその当時 150 人くらいですから、ただちに統廃合というわけではなくて、ゆくゆくはそういう事も考えてという事で、学校の新設と校区の見直し。一方では、統廃合の問題もあったかと思いますが、そのあたりを全体として考えていたようです。ただ、財政的な問題等もありましたし、その辺がうまくいかずに校区の見直しが最終的には困難なことになっていました。それがまず、ご質問に対する回答です。

それから、市としての基本的な考え方ですが、市の教育委員会のなかでも指導面については、教育文化運動なり様々な取組みを行っていますが、学校の通学区域の

あたりをどうしようかというのが、実際にはなかなか基本的な方針が決まらずに、歴史的な経緯もありまして、通学区域の見直しとなりますと難しいのですが、そのあたりについては今まできちっとした議論ができておりません。今回についても、小学校区と中学校区がぐいちになっている状態で、なおかつ統廃合という問題も出ておりますので、このあたりについては審議会でも色々ご意見をいただきまして、その上でまた教育委員会の中で色々議論をしながら、一定の方向性を出したいと思っています。現時点ではきちっとしたビジョン、方向性というか、そういった事は持ち合わせておりません。

【会 長】 この件について、もしご質問ご意見、いろんな委員から意見、感想等出ましたので、それについてのご質問ご意見でも結構ですのでいかがでしょうか。

【委 員】 通学区域については、議論できていないという事だったんですが、教育面として小中一貫のことも話が出ていました。事務局から寝屋川市はかなり進んでいる、岸和田以南についてはそこまで及んでいないという話だったのですが、いつかは考えるのかとか、何が遅れているからそこまで及ばないのかとか、その辺の教育内容も含めたところでビジョンはあるかどうかをお聞きしたいのですが。

【事務局】 北摂の 3 市に寄せていただきまして、元々は統合したところの課題といいますか問題点の調査をしに行ったのですが、その中で各市共通しておっしゃられたのが、小中一貫教育をするために通学区域の見直し、あるいは統廃合を行っているということで、その辺は今まできちっとした議論を行っておりませんでしたので、我々にとっては非常に新鮮といいますか、やはり教育を考える上では、校舎等のハード面だけではなく制度的な問題、そこから教育の指導面というのを考えていくべきであるというふうに感じました。これについては、市の方でも小中連携という形ではやっているのですが、なかなかそれでは徹底した形はできない、小学校 6 年生、中学校 3 年生ですけども、小中一貫教育で初めて 5 年・4 年制、あるいは 4・3・2 という形で 9 年間を過ごすような考え方をとってみたりとかいうことで、その辺については小中一貫の教育をしていく中では、我々が今後検討すべき課題であるというふうに考えております。

【委 員】 なかなか難しい回答になっているんだろうと思いますが。

【委 員】 何が遅れているのですか。

【会 長】 例えば世間は小中一貫といいますよね、本当に小中一貫が良いのかどうか、結果は出ていないです。それは教育の流行でよくあります、例えば 3 学期制より 2 学期制だと言って、右に見習いで皆が 2 学期制になったのですが、結局その効果がなかなか出てこなくて、今また 2 学期制が 3 学期制に戻ってきているところがあります。そういうふうに、教育は課題があるから何か次の一手を出すんですが、それは本当に満足いくものかどうかどうなのか、それがまた戻ってくる。つまり教育というのは歴史をみると、

日本の教育は振り子で今は本当に小中一貫、色々やっているのですが、何年後かあるいは何十年後かにやっぱり元の方が良かったよねとなるかもしれない。ここがちょっと微妙なところで、教育委員会の肩を持つつもりはないですが、それが良いというふうに思ったら走り出すと思うんです。やはりそこがまだ見えてこないという部分もありますし、例えば学校選択制というところで東京はガンガンいってますが、そうするとほとんど子どもたちは集まらずに、そこの教育が荒れてくるとかやっぱり課題が見えてくるわけです。だから一概に本当に良いものだったら走り出すんだらうけども、多分教育委員会としてもそこの辺がまだ計算的にできていないか、しっかりしたものが持てられないで今のような答弁にせざるを得ないんだらうと思います。

【委員】 今の話の中で改革をしたんだけど結果が見えてこないというのは、何を期待してやり方を変えたか。その期待を数値化できていないから、答えが見えないわけで、それは無策です。

【会長】 おっしゃるとおりです。

ただ、課題が多すぎて、課題を解決するためにどうしたら良いか、何かの施策を出していかないといけないという行政の弱さも実はあるわけです。それは市町村に限らず国の政策でもそうだと思います。では今のままで良いのかというと、住民の方々が満足いただけていないという事であれば、また新しく政策を出していかなくてはならないという苦しみもあると思います。

【委員】 寝屋川市については、元々議会が空き教室が沢山あるので、これを全部足すと学校2校くらい減るのではないかと、当初は現実的な話が先ずありました。それとは別に、教育現場では、不登校と学力が低いのと中学校が荒れているという状況とがあって、特に中学校で大きく悩んでいました。これらの現実をどう解消しようかというふうに考えていく中で、恐らく小中一貫教育という方法が良いんじゃないかというふうになったのです。不登校や学力の低下というのは、学力が低いというのは、ひょっとして小学校から中1にいくときの接続に問題があるのではないかという話になりました。そうしたら接続を上手にするには、やはり小学校はそのまま一つのところに上がるように集団は保障してやる方が良く、継続的に6年より9年間を見据えて指導をしてやると、中学校の先生はその子が小1のときから知っているというふうに、見続けてあげるというメリットがあるんじゃないかという話になりました。ただ教育委員会がなかなかそこへ踏み込めないのは、全面的な校区の線引きをするというのは大変なことなんです。昨日まで行くことができた小学校に、明日から行くことができなくなるという所があちこちに出る。そのあちこちの人たちに、皆にお願いして回る、説明して回る、10年後どうぞ見てくださいと言って回る、それから議員にももう一度説明していく、最後は議会での議決が必要となりますので、それはものすごい労力と時間とエネルギーと、線引きの当事者になられる住民、保護者の人たちの我慢やら、無理無理の納得やらが必要になるというところで、やはり行政というのは皆の幸せをできるだけスムーズに考える事も大事なので、踏み出せないという事はあったと思います。

【会 長】 行政側からするとそうだということだろうという。

【委 員】 小学校を見学しての思いの中で話していなかったのですが、例えば第三小学校が少ないから、第二小学校の校区変更で近隣の町会の人第三小学校の方へ来たとします。そうしたら第二小学校は最新の設備があつて素晴らしい校舎です。その子たちが第三小学校の校舎へ来たなら父兄が何というかというのは、一番最初に見たときにそれは思いました。絶対父兄が反対します。みなさん税金を払っているのですけれど、同じ環境で公平に利益を受けているわけではないです。古い校舎のところで、片や冷暖房のところ、片や冬になったら灯油をつけて、そういう学校の違い。みんな税金払っているんだからみんな平等にしてくださいという話になってしまうので、そうしたら地域の校区編成は難しい話になると思います。

【委 員】 小中一貫校の良いところを聞いたところ、小学校でのその子の学力にせよ、色々な内面的なものにせよ、中学校にその情報が大体そのままいくという話で、それはすごく良いなと思う。もう少し小学校での教育なり、その子の現状なりが少しでも中学校の方に情報がいくというのは、すごい大事なかなと思うことが多々あった。小中一貫校というところで、今後の教育の中で先生方も学校も変わるし、情報を共有できる場をなるべく作っていただくというのは、すごいいろんな面で良いかなと感じます。その子の情報がそのままその子に係わる人たちに少しでも入っていくというのは、やはりすごい大事なことなので、教育の中でそれを先生方の中で取り入れていただけないという場は欲しいと切に思いました。

【会 長】 教育内容としては当然のことだろうと思いますので、またお願いしたいと思います。前にもお話したと思いますが、小中一貫なのか小中連携なのかという、全国みていると小中一貫と言いつつも、小中一貫ではなく、ほとんどが小中連携なんです。品川区のように、小中一貫といって同じ建物の中に小学校と中学校が一緒に入っているんだったら同じ子どもたちを両方でみていく、小中一貫という名前にもなるかも知れませんが、建物が別々で小中一貫ですといって、週に1回先生方が集まる程度で本当に小中一貫なのか。小中一貫は、いっぱい課題があつて、まだまだこれからなんだろうと思います。

【委 員】 学区ということで特化させていただきたいと思うのですが、現時点ではないということで回答がありました。教育委員会の立場としては、ここの中の議論を聞かせていただいてからやっていきたいという話だったと思います。こちらの方はこちらの方で逆に1回出してちょうだいよと、多分そういう思いだと思うんです。何かたたき台を出していただいたら、それについてあーでもないこーでもないというふうなことが多分言えると思う。いろんな問題についてカテゴリーを作らせていただいて、それをこの審議会でこの件についてはこうしましょう、この件についてはこうしましょう、と言っていかないと、なかなか前に進んでいかないと、第2回目に話をさせていただきました。

先日いただいた資料の中には、そういうものがまだ見えていない。泉佐野市の 13 校はすべてが均一ではない。大規模と小規模があることをはっきりといっている。大規模と小規模があること自体が、やはりこれは今は是正していかないといけないという意見はたぶん共有化されているんじゃないか。その方法論として、全部の学校を一旦チャラにしてもう 1 回作り直すのは大変なんだと。小規模のところは統廃合していかないといけないという方法論については、これは様々な議論があると思うんですが、一つは学校の選択の自由というのが小中学校の場合は保障されていません。学区が決まって基本的にその学区でいきますよと。私立の小中学校へ行かない限りは保護者には学校選択の制限がかかっているわけです。先ず、市教委としてお願いしたいのは、これから 10 年先時間がどれだけかかるか分かりませんが、先ずは泉佐野市の小中学校の教育環境を基本的には同じような方向にもって行ってあげたい。一人ずつピタッといかないと思うんですが、そんな大きな格差にならないようなものを一つ考えていただきたいなと思います。一つの方向性として出して欲しい。これは、諮問理由の中には本市教育委員会としては、小学校における児童数の減少と不均衡によってもたらされる教育上の課題を明らかにし、より良い教育環境の整備に向けた方向等について検討をする必要があると考えていますと。まさに教育環境の水準のアンバランスを無くしていくということを、まずは打ち出す必要があるのではないかなと。その方向性を先ずは一つ確認しておきたい。

二つ目としては、7 年前に学区の再編は困難であると。そのときには市町村の合併の話があったんですね。困難であるというのは、7 年前にそういう話がありました。しかしながら、現在の状況というのは市町村合併はちょっと遠のいた話になっておりますし、人口につきましても、急激に増加するという事は今日的な日本全国の人口問題から考えると非常に難しい。更に過去 3 回までの審議会の中で、就学児童数に関していうと平成 28 年に 5,494 人というふうに現在でも約 1,000 人減ります。そこまでは明らかになっているわけですから、これまでのようないわゆる人口が増加することを前提としたいろんな施設とかそういったもの、教育環境とかいうのではなくて、そろそろ人口減少傾向を踏まえた上で将来世代にまず負担が残らない、そして皆さんが納得できるような、何か明るいつまりプラスアルファになるような内容を盛り込んでいくようにお願いしたい。

三つ目は、10 年後には皆さんが納得できる良い内容が提供できるよというものをご提示いただければなと思います。一つの例としては 2 回目の資料の 3-3 府内市町村における小学校統廃合の事例の中で、摂津市の例でいうと統廃合によって得られた財政資源の一部を、教育の充実の方にまわしているという例があったかと思います。そういった工夫をすることによって、皆さんの合意を得られるような形に持って行っていただきたい。

四つ目は、制度設計に当たっては、必ず保護者及び住民との合意、形成に努力をしていただきたい。粘り強く、その地域のよくお話を聞いていただきたい。11 人の委員の中でもこれだけのいろんな意見が出て、これだけのいろんな有益な話が聞かれてるわけですから、これを全市的に各小学校、小学校を取り巻く校区の住民の皆さんから意見を聞けば、色んなものが出てくると思うんです。大変な作業ですが、やって

いかないと、結局答えが出てきませんのでこれはお願いをしたい。

五つ目は、この問題について答えというのは、将来像を出す。その答えにいくまでの過程も勿論大事なんです、一定の期限を設けないといけない。達成年限をつけていく必要があります。環境の変化の対応が遅れたことが、今日の大規模、小規模というのが生まれた原因にもなっているので、必ず予想通りになるかどうかは分かりません。必ず達成期間を決めたときには、概ね3年とか5年経つと再評価をしてその時のやり方が本当に良かったのかどうかを見直していくという、再評価を行っていただきたいと思います。教育委員会としては、この審議会の中に一つの理想形を求めているんだなあというふうに感じますので、これについても併せてたたき台として議論をしていただきたいと思います。適正学級数、適正規模を考える上で、どうしても避けて通れないのは就学児童数の見通しということになると思います。現在、平成22年度では6,419人、平成28年度は5,494人、5年先まで分かっているので、その先が増えるのか減るのかは分かりません。全国的な傾向から見ると、恐らく減る方が可能性としては高いと思うのですが、国も少子化対策をしているので上がることもある程度想定に入れておく必要があるんじゃないのかなと思います。今から10年後5,494人のプラス10%6,043人、マイナス10%4,944人になりますので、この間の幅の中でモデルを考えていただけないかなと思います。期限を設けることについては、他市の例をみますと、方針が出てから約1年以内の間に実施計画がまとめられているケースが多いかと思います。適正化を達成していく目標の年限としては、平成24年4月1日から平成33年3月31日までのこの10年間の間で、何らかの方策を練っていきますよというようなビジョンを示していただけたらと思います。

方策としては、先ずは大規模校のことが今回、一つのテーマになってくると思います。小規模校については、小規模を解消していかざるを得ないなという意見の方が大半だと思います。大規模校を今後どうしていくかということについて方策をつけていただけたらと思います。地域住民の皆さんとコミュニケーションを図っていく中で、いろんな要望等が出てくる。一つは学区の選択の幅がもう少しあった方がいいのではないかという意見も出てくると思いますので、そういった条件付きの学校選択制も併せて検討していただけたらと思います。適正学級数、国や府あるいは他市の例で先ず議論が出てくると思いますが、ある程度学校全体の規模、法律の縛りがある中でいかにしてそういうふうな形にもっていくか、どういう形が一番いいのか、25人から30人の間が良いよという先生が多数ある中で、しかし20人が18人くらいの学級ができてしまう可能性もあるわけで、その辺をどういうふうにもっていくのかなというところもお考えいただきたい。大東市の例でいうと、学校全体の総人数についても答申の中に出ていた例があったかと思います。そのあたりも参考にさせていただいて、1学級数の目標児童数を決めてそれにもっていくための学級編制をどうやっていったらいいのかということです。統廃合については、必ず住民との合意形成に向けて、粘り強く相手の話を聞いていただきたいと思います。それから通学区域を考えていく必要があると思います。通学距離については、なるべくなら遠距離が無くなるような形で考えていただきたい。土地利用については他市の例でもありますが、防災拠点、公民館とか、本来学校教育とは別の教育ニーズもあるはずなんです。そういったところに転用でき

るような、うまく教育委員会の中あるいは市長部局の中と連携してプランをつけていただければと思います。泉佐野市の独自で、プラスアルファになるような教育サービス、他市の例でいうと独自に色々やられている例もありますので、統廃合等によって財源が得られた分の一部は、新しい教育サービスに活用していきますよというような未来が見えるようなプランをご検討いただけたらと思います。先ずは、市教委側からこんなプランどうでしょうかというふうに、この審議会の中に投げteいただいた方が多分皆さんは良い悪いを言えると思います。また傍聴に来られている方も、そういった資料を見ることによってこんなことを考えているのかということが分かりますので、ご参考にしていただけたらと思います。

【会 長】 すでに次の案件の方に入っておりまして、第3回の審議会に引き続きまして、一番のポイントになってきます適正規模ということで、だいぶ出尽くしたかなという気もありますが、小学校の適正規模、諮問内容は適正規模と統廃合ということなので、まずその適正規模というところでご意見をいただければなと思います。前回もだいぶ出た感はありますがいかがでしょうか。今回の学校訪問を受けてでも結構ですので、12から24ですね、どうでしょう。

【委 員】 以前にいただいた資料等を見ていくと、全体としては14から24クラスというのが一つの適正規模の標準として出されているところが多かったと思いますが、泉佐野市もそれにならわれたらどうかなと思います。

【会 長】 他いかがでしょうか。

【委 員】 学級数がある意味で、職員の数を決めますので、そうすると違った観点からなりますが、学校経営上といいますか、子どもの教育にあたる先生方の共通理解等や情報の共有のスピードということを考えますと、経験則としては、多くても3クラスが一番、学年3クラスということですね、従って少なくとも2クラス、2、3ということになると単純に学年2かける6で12、あるいは3かける6で18そこへ支援学級がプラスされてきますが、大体それが適正かなというふうに、これは経験則からになりますますがそのように思います。

【会 長】 教員数ということで、先生方の動きもいろんな方面からみられるというようなことも考えられるかと思いますが、他いかがでしょうか。

【委 員】 結論から言いますと、基本的に12から24学級、1学年2から4クラスがベストな数字かなと思います。教員数という話もありますし、もう一つは今非常に大量採用がされています。新任の先生が独り立ちできない中で、学年のサポートが非常に大きなウェートを占めているということがあって、1クラスに新任が入ったときのしんどさというのは、2学級3学級の学年に入れてもらうのとはえらい違いかなと。そんな教員の配置ということも踏まえて、子どもたちの数と同時に学級の数ということでも12から24が

適当かなというふうに思っています。

【会 長】 他いかがでしょうか。適正規模、クラス数ということで。

【委 員】 中学校からみてデメリットというのかなり大きなものがありますので、一概に小学校と同じとは言えませんが、中学校の場合、いろんな先生が関わりますから、先生同士の人間関係というのはあまり重視されないんですが、小学校は 1 学年 2 人の先生が担当される、その相性とかいう部分ではどうなのかなあっている気はするんですけど。適正規模とは若干ずれていますけど。でもそれは、学年を運営する上でかなり重要な部分かな、というふうに感じるところもあるんです。

【委 員】 人間関係という表現をすると、ちょっとパーソナリティーの部分が影響してくるので、その部分は除いたとしても、先ほど他の委員が言われたように大量に新任の先生が入ってくると、仮に一つの学校に 4 人の新任を受け入れたときにどうなるかということになりますと、少なくとも小学校 6 学年の内一度に 2 人配置するということは、同じ学年 2 人いることはやはり避ける話になると思います。単純に 1 学年に 2 クラスしかない学年に 2 クラスの新任を入れるということは先ず考えられないし、来年は少し緩和されるようですが、今の現状では新任の先生は出張が非常に多いです。仮に 2 クラスで、経験のある先生と新任の先生がペアを組むとなったときに、小さい学校であればあるほど、担任を持たない先生が少なくなってきますから、そうすると同じ学年の先生が隣の抜けた先生の学級の世話をしたりとか、あるいは指導も新任としての指導をするということになってきますと、2 人というのは受け入れる初任者の人数にもよりますけれど、やはり厳しいものがあるかなと思います。従って、2 人というのは相性の問題ということは勿論あるのかもわかりませんが、そこは未知数な部分がありますので、うまくいく場合もあればうまくいかない場合もあって、答えになってない答えになるか分かりませんが、3 クラスくらいになれば今言ったようなことは少し緩和される可能性がかなり高いというふうに思います。

【会 長】 ちなみに泉佐野市では、平成 22 年度新任は何人採用されていますか。

【事務局】 41 名です。

【会 長】 平成 23 年度は。

【事務局】 43 名です。

【会 長】 この傾向はしばらく続くというふうに。

【事務局】 でも、もうピークは過ぎました。この 7 年くらいで約半分が入れ替わりました。

【会 長】 かなりの数ですね。今おっしゃられたようなことは、重々考えられることだろうと思います。

【委 員】 何人中何人ですか。

【事務局】 全部で約 530 名です。

【委 員】 530 の内の 40

【会 長】 8%くらいですか。他ご意見ありませんでしょうか。

【委 員】 今までの話を聞いていると、最低は 12 学級はいるんかなと、そこはかなり共通できるのではないかと。上を 18 にするのか 24 か。それと 1 学級何人にするのか。これで学校全体の人数も決まってくる。しかし、府とか国から貰うお金はその観点だけからみれば、自動的に決まってくる。だから、泉佐野市独自でビジョンを後から出していただけと、国や府とか関係なく泉佐野市はこうやるということが出せるんなら、プラスの人員を色々議論してもいいけれどもそれは難しい。国と府とその範囲内で考えるんだというそのビジョンであれば、自ずからこれは決まってくるんじゃないかなあという感じがしました。

質問ですが、530 人のうち例えば 30 歳を線にして若い方がどのくらいの割合でいるのですか。

【事務局】 アバウトですが、20 歳代でおよそ 3 分の 1、30 歳 40 歳代でおよそ 3 分の 1、50 歳代以降で 3 分の 1 です。

【会 長】 30 歳 40 歳代が薄いということですね。

【事務局】 その時期に採用がほとんど無かった時期がきていますので。

【会 長】 その方が徐々に管理職になっていくということになりますね。

【委 員】 男女比はどうですか。

【事務局】 小中では違うのですが、小学校ではおおよそ男性 1 に女性 2、1 対 2 の割合です。中学校はほぼ 1 対 1 くらいです。

【会 長】 学校訪問を含めて 3 回に亘って適正規模とか方策等について委員の方々からいただきました。施策に反映するためには、すぐにでも答申を出していかなければいけない、ということになっていくと思います。いろんな方々から教育委員会の考えはというようなことが出ました。勿論それは教育委員会に限らず出して、そして議会で

たたくということになっていくと思いますが、我々の使命とすれば、このいただいた諮問について、回答していかないといけない。つまり答申を出していかなければならないというのが我々この委員の役目で、これに関しては教育委員会がどうのこうのではなくて、それをまた色んなところでたたいていただくということになっていくんだらうと思います。そこで勿論案にはなるんですが、全くのたたき台です。次回に、ご意見いただいたものをこの場で見ていただいて、それをたたいてあるいは揉んでいき、最終の答申に向かって作っていきたいというふうに思っていますので、あらあらのものかも知れませんが、次回までに 2 人で一応たたき台を作らさせていただきます。そしてご意見をいただいて、この文章はどうだとか、ここはこうした方が良いというような意見をいただいて、答申にもっていきたいというふうに思っています。それでよろしゅうございますか。

異議なし

【会 長】 では、そういうふうにさせていただきたいというふうに思います。勿論我々が勝手に書くようなことではありません。今までずっといただいた意見をまとめていくと。でもそれは決定ではなくて、単にたたき台で案であるということをご理解いただいて、またこの場でご意見をいただければと思います。例えば学校選択制とか、小中連携の話、あるいは通学区域の話もありました。それをこうしろではなくて、こういう課題が残っている、それを教育委員会の方に投げるということも当然可能だと思いますので、どこまで書けるかは色々考え方があろうかと思いますが、またそこでもご意見いただければというふうに思います。

次回第 6 回目の審議会は 3 月 28 日(月)午後 6 時から市役所 4 階庁議室で開催いたします。これをもって第 5 回審議会を終了いたします。